

平安朝の和文の日記と漢文の日記

—「ジャンル」に関する一考察—

Edward Kamens

平安朝文学史の方法論の一つの問題として、「和文」の日記と「漢文」の日記の関係を改めて考える必要があると思います。10世紀と11世紀の所謂「女流仮名日記」の解釈方法又はその文学史に於いての扱いは普通、同時代の（男性の）漢文の記録という「ジャンル」の扱いと異なるだけではなく、全く別の話しとして取り上げるのも普通です。テキストとしては、両種類の日記の性質は勿論根本的に異なっている点が多いことはいうまでもないことでしょう。しかし、この根本的な相違点を認めながら、両種類を同時に、または統合した立場から再検討するとどうなるでしょうか。

一方、此の方法論の問題性は「文学」と「歴史」、あるいはジャンルとジェンダーとの範疇の定義づけの問題と深く関連するのではないかと思います。又、日本古典文学研究に於いてのジャンルそのものの分化方法と定義付け方と関連します。特に欧米の日本文学研究及び文学史という分野あるいは既に国際的になったその分野一般に於いては（私は比較的最近に観察した問題だといわざるをえないのですが）、大ざっぱにいうと「ジャンル」という術語及び其の概念は未だ充分理論化されていないし、未だ充分歴史化されていないと思います。ここに、私たちが専門にしている分野では「ジャンルという術語と概念は充分に理論化されていない」とか「充分に歴史化されていない」とあえて申し上げますが、この言い方は英語の専門用語の“under-theorized”または“under-historicized”と理解いただければよいと思います。

此の発表ではまず、最近行われた海外の日本古典文学及び文学史研究の方面に目立つ「ジャンル」に関する幾つかの問題点を上げます。その関係で、「ジャンル」という術語と概念はいつ、どこに、またはどういう過程で日本文学に関する言説に扱われるようになったという歴史的現象を再検討して見ます。最後に、日本古典文学研究と文学史における「ジャンル」の言説の幾つかの話題のたった一つの例として、平安朝の所謂「和文・仮名の日記」あるいは「日記的」テキスト及び所謂「漢文日記・記録」のわずか少数の箇所をちらっと見て、今まで通りの別々の扱いの代わりに、同時的な、あるいは隣接的な、もしくは接触的な扱いを試みた場合はどうなるかという案を提出して見たいと思います。

日本古典文学のカノン形成を問題として取り上げた最近目立った研究では、ハルオ・シラネ氏と鈴木登美氏が編纂した『創造された古典／“Inventing the Classics”』があります。国内にも海外にも出版された時から長く将来まで影響のある研究だとも思います。そのなかの「総説」又は「カリキュラムの歴史の変遷と競合するカノン」と題する「第X章」にはシラネ氏は資料の1.に引用したように、カノン形成の過程と深い関係ある「ジャンル」についての歴史的説明を十二世紀の「源氏物語一品経」から始めています。しかし、この「源氏物語一品経」にはいくつかの文学の種類は指示されてリストの様に並べているという事は言えるものの、「ジャンル」に一致する詞もしくはその概念に当てはまるような概念は無いと思います。資料の2.に見られるように、「源氏物語一品経」の導入部に後の文学研究に問題に成る「文學」と言う詞または「典籍」も見られるし、その「興（リ）」や「趣（キ）」については「旨旁分、義區異」と書かれてはいるけれども、これは「ジャンル」の認識の証拠に直ぐさま読み解く訳には行かないと思います。シラネ氏と鈴木氏の編纂した本はカノンとジャンルまたは「文学」そのものに関する大切な新しい歴史的説明や改正的な解

釈で有効な研究であるには違いないですが、その「ジャンル」という術語の採用も此の例でみられるように、未だ十分歴史化されていないと言わざるを得ないと思います。

一体、「ジャンル」の定義は何であろうか。恐れ入りますが、今回の発表では、この質問にたいして最終的なはっきりした答えを期待される方々は失望されると思います。なぜかと言えば、私は現代欧米の「ジャンル理論」についての研究を吟味した結果、理解したことはまだまだ足りないですが、すくなくとも言えることは、「ジャンル」と言う詞またはその概念の意味はいつも、その使用している時と所と状況によって変わりつつあるという物だということです。一時に固まった意義や形をとってその後変化しないような現象ではない。

勿論最近のものではないけれども、資料の3.のd.とe.にYury Tynyanov氏の1924年の此の関係の発言またはTzvetan Todorovの1976年の発言を御覧に成ると分かると思いますが、此れ等の理論的テキストをもとにした現在の「ジャンル理論」はこの根本的な特質として、または「ジャンル」の問題を理解することをより複雑にされるその概念自体の流動性を認めているとは確かに言えると思います。

併し、「ジャンル」の言説を可能にされる為、またはその言説の便宜の為、資料の3.のa.に見られるような定義みたいな試みも必要です。また、「ジャンル」その物と「ジャンル意識」、言い換えれば書き手あるいは作者の文書作成の段階や過程に於いての「ジャンル」に対する認識（またその不在）の区別を強調して論じる学者もいる。この区別を充分認めないで、一方ある「ジャンル」そのものを構成する特性と、一方ある書き手／作者のそれぞれの「ジャンル」に対する認識またはその不在またはその場合によつての曖昧さと誤解する為に、多くの文学研究者はその論文を出発点から不利にしている。私自身もこう言う誤解をしたことはあると思いますが、やっとのことで国際的な学問分野

となった日本古典文学研究または日本文学研究一般に参加する私達は此の意味では、「ジャンル」という術語と概念の扱い方をより理論的に、より歴史的に再検討して、改めて其の定義と範疇と使用について論議した上で共同的に研究を進行させる為の新たな努力が必要であると思います。

此の様な共同的努力をする際、「ジャンル」の定義付けは困難であっても、資料3.のe.のTodorov氏が提案するように、その術語を注意して採用することは可能でしょう。Todorovは、『『ジャンル』として指示するテキストは、歴史的に『ジャンル』として認められたテキストに限られると、『ジャンル』という概念は有効に保てる』と言うし、その歴史的に「ジャンル」を認められた事実や証拠を「ジャンル」そのものを話題にした“discourse”（言説）あるいはその“meta-discourse,”もしくは場合によっては文学的テキストそのものに求めなければならないと言う。そうしますと、たとえば『源氏物語』「絵あはせ」の巻に見られる「ふるものがたり」に対する歴史的意識やそれぞれの作品の比較は「源氏物語」に内在する「ものがたり」のジャンルとしてのdiscourse（言説）であろうし、『三寶絵』の総序にある物語批判あるいは『源氏物語』「螢」の巻の所謂「物語論」はそのmeta-discourseの例と見れば、少なくとも「物語」はTodorov氏が指示したように「ジャンル」と認めてもよいでしょう。また、『土佐日記』の初頭の「日記といふもの」の箇所や「蜻蛉日記」の初頭の「ものがたり」と「日記」を対照した箇所（信頼出来るか出来ないかという問題のある箇所ですが）おそらくこの二つの「日記」に内在する「日記」というジャンルの歴史的認識の証拠として読み取ってもよいでしょう。

ところが、今話題に浮かんできた「日記文学」についての文学史的叙述方法には「ジャンル」の定義、範疇、扱い方にはまだまだ問題は残っていると思います。この問題を取り上げる海外で出版された最近の研究の一つ例として、Joshua S. Mostow氏の*At the House of Gathered Leaves: Shorter Biographical and*

Autobiographical Narratives from Japanese Court Literature (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004) という本があります。

資料の4.からお分かりになる様に、これは10世紀の「土佐日記」と「蜻蛉日記」の年表的な狭間に現れたいくつかの「短篇仮名日記」を紹介した研究をかねた翻訳集です。Mostow氏はその序説に於いて、先ほどの話にもあらわれたシラネ、鈴木氏の『創造された古典』の中の鈴木氏の所謂「女流日記文学」の「ジャンル」としての歴史的構築とそれ以来の扱い方についての豊かな新しい研究論文をもとにして、この10世紀の仮名日記の享受史と文学史に於ける立場を再検討し、「『九条右大臣集』を初め、『伊勢集』を通して『高光日記』、『豊蔭物語』と『本院の侍従集』に通ずる、少なくとも『蜻蛉日記』までの血統 [lineage, 系統]」がある」と論じます。この論議にはまだいくつかの疑問される点はあると思いますが、私はここに問題にさせたい点はただ一つだけです。つまり、この10世紀の所謂「日記文学」のジャンルあるいはMostow氏が使用する術語で言い換えれば「日記」という「モード」(mode)の論議の中では、まったく同じ十世紀あるいはその後にも、もうひとつの日記のタイプとして文学史に重要な存在として見逃すことの出来ない所謂「漢文日記／記録」はなぜ言及されないのでしょうか。(なお、この「モード」(mode)という術語の定義や使用については、資料の3.のc.を参照して頂きたい。)

10世紀の所謂「日記文学」あるいは文学/文化史の徹底した纏めた記述には、そういった「漢文日記／記録」の特質と「仮名日記」の特質の比較や対照にした分析の試みは現れていないと言うことは、不思議に思わざるを得ないと思います。Mostow氏の「短篇仮名日記」についての序説はそういう記述としては書かれてはいないでしょうが、私はそういう徹底した纏めた記述には、話題は十世紀または十一世紀の文学史／文化史にしますと、まずこの日記の二つの種類を同時に取り扱い、互いに対照することは必要な、有益なことだと思います。しかし、稀に採用されている研究方法です。1999年に出版されたEdith Sarra氏の *Fictions of Femininity: Literary Inventions of Gender in Japanese Court Women's*

Memoirsは幾つかの女性の仮名日記をあらたに分析する研究ですが、二三箇所において手短かに漢文日記の具体的な特質を説明して仮名日記のそれと合わせて論及するのは誠に例外であるけれども、両種類を対照にした纏めた研究にはなっていない。

ここに問題にしている「ジャンル」という外来語はいつ、どこに、あるいはどういう風に日本語で行なわれる文学研究あるいは評論やその他の文学に関する言説に採用されるようになったのでしょうか。資料の5.からお分かりになる様に、明治前期の和英／英和辞典に現れたのは“genre”ではなくて、その全身といわれてもいい、生物学関係の“genera”であった。A.C.Hepburn氏の国内にも海外にも出版されたそれぞれの辞典に多少の差異はあるものの、この“genera”に対する日本語の単語は一貫して《類》、《部類》、あるいは《種》でした。因みに言及しますが、1867年（慶応三年）のHepburn氏の辞典の初版にgeneraおよびgenreという単語に類似性のある詞“gender”も見えるし、和訳は資料に見られるようにローマ字で“Mesz-osz; shi-yu”（メス/オス、種）になっていますが、遡って五年前に出版された堀達之助氏等の『英和对訳袖珍辞書』には変わって和訳の中にはHepburnにあらわらない「血統」あるいは“genus”の訳語として「氏系、血統」を使用しました。これは先ほどのMostow氏の引用した所のジャンルの年代的な連続を一つの統一した流れと見た意味で使用した“lineage”と反響するといえるでしょう。しかし、資料の6.に示した様に、明治八年（1875年）の福地桜痴氏が書いた「小説伝奇／ノウエル」についての『東京日々新聞』の論説には、文学のタイプはまだ「類」であってジャンルではないです。飛ばして資料の7.に示したように、1912年（大正元年）に出版された厨川白村の「近代文学十講」に「文藝の独立した一部類」の振り仮名として「ジャンル」がようやく顔を見せる。ただし、これはおそらく資料8.のFerdinand Brunetièreの*Manuel de l'Histoire de la Littérature française*（『仏蘭西文学史序説』）を意識しての使用であったと言われています。つまり、ラテン語

をもとにする英語のgenusやgeneraは生物学関係の術語のまま採用され、語源をおなじくする「ジャンル」は文学関係の術語として19世紀末にフランス語に習って仏蘭西文学史のその採用をモデルにして導入した詞である訳になる。そして以前の「類」とか「部類」とか「種」またはBrunetièreを訳した関根秀雄氏が採用した「様式」も、文学それぞれのタイプやclassを意味する詞としては姿を消し、「ジャンル」は外来語でない外来語として圧倒的に至るところに採用されるようになった訳です。いうまでもなくそれはそのまま現在までの状況です。東洋西洋問わず、よく注意して採用する方もいるし、あまり思慮なしに採用する方もいます。

では、「日記」というものの「ジャンル」としての有様はいかがでしょうか。皆様は「仮名／和文日記」と「漢文日記／記録」の普通の個別性の強い扱いの根本的な原因はよくご存知の所であると思います。和文仮名日記、特に「女流仮名日記」といわれている物は明治前期以来の「文学」そのものの概念構築過程の上でやはり「文学」と認められてきた。併し、「漢文日記／記録」は過去の文化史、政治史、生活史などの豊かなデータを保存する唯一な遺産として学問的資料のカノンに中心的でありながら、ほとんど「文学」の観点から研究されはしない。同時に、10世紀、11世紀の「仮名日記」または物語や説話類を含めたその他の和文の文学作品は度々歴史的な資料として扱われて来たこともあります。その方法には色々問題はあると思いますが、論点を「日記／記録」の扱いに限定しても、現在の「文学」それ自体の範疇は幅広く、定義が流動で、変形させやすい、絶えず変形されつつあると見るのが常識と成っていると言えるでしょう。そうだとすれば、両種類の日記の同時扱いまたは統合した方法で研究することにさしつかえないだけではなく、充分理にかなった方法であると思います。近年、今まで歴史的な資料と見られたテキストを文学的な観点でそのレトリックや構成を分析しながら読み解く方法も、「日記」両種類の同時扱いを裏付けると思います。また、焦点をもつばら「仮名文」におきっぱなしに

しますと、もう一つの近代／現代文学史における一方的にジェンダー化された文学概念をそのまま問題にせず、に受け次いだ方法になってしまいます。私はその代わりに、たとえば両種類の「日記／記録」を一つの種類あるいは一つの統一されたジャンルと見ようとはしないけれども、並列式に見ようとすれば、十世紀、十一世紀の文化的地勢のパノラマの（少なくとも）この日記の部分はより詳細な形象造りが可能となるのではないかと思います。

例えば、藤原道長の「御堂関白記」と藤原実資の「小右記」並びに「紫式部日記」と（簡単には「日記」と名付けられない）清少納言の「枕草子」の日記的部分のそれぞれの箇所だけですが、ざっとこれらの箇所を貫く主題はなにかというと、歌／和歌の作成及びそのやり取りのエピソードであるとのこと。

- 長和四年十月二十五日の道長五十の賀の時に藤原公任が祝いの歌を送り、道長が答える。（『御堂関白記』。「古記録フルテキストデータベース」参照。

http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/cgi-bin/ships/koki/koki_login.sh

- 寛弘二年四月二日、道長は機嫌を悪くしている公任を慰めようとして歌を送り、公任は愚痴っぽい返事をする。（『小右記』。「記録フルテキストデータベース」参照。）
- 紫式部は重陽の節句の折り、「殿の上」倫子より「菊の綿」を目出たい贈り物としてもらって、慌ててお礼の歌を詠じたがその便りは倫子に届くには間にあわなかったので失望する。（『紫式部日記』、九月九日の件。新日本古典文学大系版257頁参照。）
- また、若宮の五十日の祝いの夜遅く、式部及び宰相の君は酔っぱらいの殿上人から隠れているところに道長に見つけられて、「和歌一つつかまつれ」といわれて、「いとわびしくおそろしければ」と文句をいいながらすぐに歌を詠むと、道長も大変喜んで「さばかり酔いたまへる」所為か「いと疾う」歌一首を詠み、益々喜び自慢する。（『紫式部日記』、若宮誕生後五十日目の祝儀。新日本古典文学大系版283・84頁参照。）

- 変わって、寛弘元年二月六日雪の朝、道長は前の日に見送った春日の使いに任じた息子の三位中将頼通の道中のありさまを心配して、その「こころつかひ」の歌を公任にやりますと、公任及び花山院より慰めと同情の歌をもらい、花山院にも反歌を送る。(『御堂関白記』。「古記録フルテキストデータベース」参照。)
- そうして、またの「二月つごもり^{ころ}比に、風いたう吹きて、空いみじうくろきに、雪すこし打ちちりたる程」少納言は公任が懷紙に白居易の雪の詩の一節を和歌の下二句に書き直しているのを見て、知恵だめしと判明し、恐慌して中宮定子に知らせて助力を求むが「上のおはしまして御とのごもりたり」のため、やむを得ず自分一人で上の三句を「わななくわななくかきてとら」す。(『枕草子』段102、103。新日本古典文学大系版、146頁参照。)

これらの箇所それぞれこそ文学の歴史が生きていると思います。一貫したテーマとて和歌の日々の生活に於ける役目が生き生きと描き出されているといえるだけではなく、これらのエピソードをテキストとしての構成やレトリックあるいは各テキストの前後や周りのエピソードと並べてその関係を分析する試みを招く点は多いと思います。しかし、この分析の試みには、「ジャンル」の概念は役立つのでしょうか、あるいは妨げになるのでしょうか。「文学」や「歴史」、「日記」や「記録」、「かな」や「漢文」：これらのカテゴリーあるいは「ジャンル」そのものをさておき、内容、テーマ、構成等の側面の上で類似性のあるこのようなテキストの部分あるいは全体を合わせて読み解くには価値があると思います。そうしますと、今まで此れ等のテキストの解釈や研究を指導した「ジャンル」という概念の影響は薄れて行くし、今までのカテゴリーの境界を見直す事を可能にするのではないのでしょうか。私はこれから書く文学史その他の論文に於いては、所謂「和文／仮名の日記」と「漢文の日記／記録」を同時に、同じ文章に、同じパラグラフに、統一したあるいは統合した方法で論考を進めて見たいと思います。

付（資料）

注：すべての太字は発表者によるものです。

1. ハルオ・シラネ、「総説 創造された古典－カノン形成のパラダイムと批評的展望」。ハルオ・シラネ、鈴木登美【編】、『創造された古典－カノン形成・国民国家・日本文学』。新曜社1999。※

「カノン形成におけるまた別の重要点は、ジャンルの配列である。カノン形成の歴史は、少なくともヨーロッパの伝統においては、しばしば異なったジャンルないし様式の興亡の歴史として見られてきた。『源氏一品経（いっぽんきょう）』は、十二世紀終わりに僧澄憲（ちょうけん）によって書かれた仏教テキストだが、そこでは平安後期から中世初期に存在していたジャンルのヒエラルヒーが、大まかに言って上から下に並べられている。」（18頁、以下略）

※ 同英文は、Haruo Shirane, “Introduction: Issues in Canon Formation,” in Haruo Shirane and Tomi Suzuki, ed., *Inventing the Classics: Modernity, National Identity, and Japanese Literature*. Stanford: Stanford University Press, 2000, p. 5.

2. 増補国語国文学研究史大成 3、源氏物語 上。阿部秋生、岡一男、山岸徳平編。三省堂、昭和52年。

「源氏物語一品経」

夫文學之興、典籍之趣、其旨旁分、其義區異也、。。。 (37頁)

3. *Modern Genre Theory*, ed. David Duff. Harlow (UK): Longman, 2000.

a.

“Genre A recurring type or category of text, as defined by structural thematic and/or functional criteria. A term increasingly used in the classification of non-literary (and non-written) as well as literary texts; notably films and media programmes...” (“Key Concepts,” p.xiii)

b.

“Genre-consciousness The awareness of genre displayed by a particular author or period: an

awareness which has both a conscious component, manifest in the explicit use made of generic categories and terminology by writers, critics, booksellers, publishers, librarians and other cultural institutions; and an unconscious element, suggested by the attempts of many writers, readers and critics, especially in the modern era, to conceal or repress their dependence on genre. The forms which genre-consciousness takes, and the intensity with which it is experienced, are subject to both personal and historical variation.” (同)

c.

“**Mode** A term which, confusingly, is used in two almost opposite senses in modern genre theory: to denote the matter of representation or enunciation in a literary work (the three basic modes, in this sense, being the narrative, the dramatic and the lyrical···); and to denote more strictly literary categories such as the tragic, the comic, or the pastoral, which are thematically specific but nonspecific as to literary form or mode of representation. In this second sense, a mode is often distinguished from a **genre**, the latter term being reserved for types of literature which are both thematically and formally specific: tragedy as distinct from the tragic, comedy as distinct from the comic, etc.(同, p.xv.)

d. Yury Tynyanov, "The Literary Fact" (*O Literaturnom fakte*, 1924), tr. Ann Shukman.

“···a *static* definition of a genre, one which would cover all its manifestations, is impossible: the genre dislocates itself; we see before us the broken line, not a straight line, of its evolution···As a system, therefore, genre may fluctuate. It arises (out of the exceptions and vestiges in other systems) and it declines, turning into the rudimentary elements of other systems. The genre-function of a particular device is not something immobile···” (p.32)

e. Tzvetan Todorov, "The Origin of Genres" (*L'origine des genres*, 1976, tr. Catherine Porter.

“···genres are classes of texts. But such a definition barely conceals its tautological nature behind the plurality of terms called into play: genres are classes, literature is textual. Rather than multiplying labels, then, we need to examine the content of these concepts···It is always possible to discover a property common to two texts, and thus to put them together in a class. Is there any virtue in calling the result of such a combination a ‘genre’? **I believe we will have a useful and operative notion that remains in keeping with the prevailing usage of the word if we agree to call genres only the classes of texts that have been historically perceived as such. Evidence of such perception is found first and foremost in discourse dealing with genres (metadiscursive discourse) and, sporadically and indirectly, in literary texts themselves.**” (pp.197-98)

4. Joshua S. Mostow, "Introduction." *At the House of Gathered Leaves: Shorter Biographical and Autobiographical Narratives from Japanese Court Literature*. Edited, translated and with an introduction by Joshua S. Mostow. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2004.

"The purpose of the present collection of translations is threefold: (1) to explain the **development of what is called "diary literature" (nikki bungaku)** between its putative origins in Ki no Tsurayuki's *Tosa Diary* (*Tosa nikki*) of 935 and the first female autobiography of substantial length, *The Kagerō Diary* (*Kagerō nikki*) of Michitsuna's Mother, finished sometime around 974.; (2) to explain the political conditions that allowed for and encourage the rise of women's autobiographical writing in the Heian court of the tenth and eleventh centuries; and (3) to argue that it is a thoroughly modern prejudice that sees women's *nikki* of this period as solely 'confessional' and apolitical. In fact, many of the early instances of **this genre** were commissioned by men with a political purpose in mind. (p.1.)

"Above I have argued **that there is a lineage of texts** that runs from the *Kujō Udaijin shū*, through the *Ise shū*, the *Takamitsu nikki*, the *Toyokage monogatari* and the *Hon'in no Jijū shū*, up to and including at least the *Kagerō nikki*... (p.35)

"While the texts translated here might be 'minor' in terms of length and canonical status, they are not of minor importance. They help immeasurably in filling in the seemingly enormous gap from the *Tosa nikki* to the *Kagerō nikki*. Rather than an empty span of forty years, the *Kagerō* was preceded by almost two decades of repeated experiments in what we might call 'life-writing.' **It is only when we remove the blinders of generic distinctions that put, for instance, the *Kagerō nikki* in one category and the *Hon'in no Jijū shū* in another that we can understand the development of what would eventually (in the twentieth century) come to be known as 'women's diary literature.'** More important, we see that this trend in life-writing was not restricted to women, either as authors or as subjects. Close examination reveals these works to be, on the one hand, highly diverse in terms of their **mode** (biographical, autobiographical, epistolary) although they all have the name of a historical person in their titles, while on the other hand **they are uniformly definable as *nikki* despite the generic variety in their present titles** (*monogatari, shū, nikki.*) (p.37)

5. *A Japanese-English and English-Japanese Dictionary with an English and Japanese Index*. By J.C. Hepburn, A.M., M.D. Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1867. p.40.

GENDER, Mesz-osz; shi-yu.

GENERA. Rui; burui.

同、London: Trübner & Co., 60 Paternoster Row, 1867. 美國 平文先生編譯 和英語林集成。
一千百十七年 日本横濱梓行 p.35

BU-RUI, ブルイ、部類、n. GENERA and species; class-wo wakette atzmeru, to collect and arrange in classes.

p.361

RUI, ルイ、類、(tagui). n. Kind, sort, class, race, genus. *Watakushi ichi rui no mono*, persons of the same family name as myself. ---wo motte atzmeru, to arrange in classes.---szru, to be alike, of the same kind.

(p.40 以上Shanghai版と同じ。)

A Japanese-English and English-Japanese Dictionary [改正増補和英英和語林集成].
J.C. Hepburn [平文先生]. Tokyo: Z.P. Maruya & Co. Ltd. [丸善商社書店], 1886.

GENERA, n. Rui, burui, shi-yu (類、部類、種)

(以上、亀井秀雄氏 2005.10.22 メールにての指摘。)

*"A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language, 英和對譯袖珍辭書Published at Yedo, 1862, (文久二年、Hori Tatsunosukay et al.) にはgeneraもしくはgenreは見られないですが、

Gender, s., 種類、性ノ語 (327頁) 又はGeneric, -rical, adj. 血統ノ (328頁) および Genus, s. 氏系血統 (329頁) 等は見られます。

(杉本つとむ編、江戸時代翻訳日本語辞典。早稲田大学出版部、昭和56。)

*"An English-Japanese Dictionary of The Spoken Language by Ernest Mason Satow, B.A...and Ishibashi Masakata, 2nd. Edition. London: Trübner & Co, Yokohama, Kobe, etc...1879" には

generaもしくはgenreは見られない。

6. 磯田光一 「鹿鳴館の系譜」(文藝春秋、1983)、18頁

芸術ジャンルとしての“literature”の訳語として「文学」という語を用いた最初の用例は、活字化されたものとしては、私の調べたかぎりでは「東京日日新聞」明治八年[1875]四月二十六日号の論説－筆者は福地桜痴－のつぎの部分と考えていいと思われる。

「小説^{ノヴェル}伝奇の類は世道人心に害ありと申せども、政^{マサ}かに善を懲し悪を勧むる趣味にも非らず、公平に論じたらば利が七文で害が三分ぐらいのものなる可し。」(以下略)

7. 厨川白村、「近代文学十講」、1912。厨川白村全集、第一巻 文学論 上。改造社、昭和4(1929)。「第七講 自然派作物の特色 七 短篇小说及び近代劇」312-13

…近代の文藝でいふ短篇小说に至っては、全く一種特別な意義を有して他と截然たる區別があり、文藝の獨立した一部類^{ジャンル}をなしてゐる。英語でいふ所のshort story佛蘭西語conteが即ちそれである。單にnovelに對していふnoveletといふやうな呑氣な物語では無いのだ。

8. Ferdinand Brunetière, *Manuel de l'Histoire de la Littérature française*. Paris: Librairie Ch. Delagrave, 1898. p.i:

“En écrivant ce *Manuel de l'Histoire de la Littérature française*, qui est en meme temps, je n'ose dire la promesse, mais du moins le «programme», d'une Histoire plus ample et plus détaillée, je me suis appliqué particulièrement à quelques points…**A la division habituelle par Siècles et, dans chaque siècle, par Genres**,--d'un côté la poésie et la prose de l'autre; la comédie dans un compartiment, le roman dans un second, l'«éloquence» dans un troisième;--j'ai donc, premièrement, substitué la division par Epoque littéraires…”

9. 仏蘭西文学史序説 ブリュンチエール著、関根秀雄 訳。岩波書店、1926初版。
「緒言」 一頁

一般に行はれる世紀々々による時代別、それから韻文と散文、または喜劇、小説、雄辯という様な様式Genresに依ってする各時代の区分をやめて、余は之に代ふるに「文

亀井秀雄氏 2005.10.27のメール引用：

関根秀雄訳・ブリュンチエール著『仏蘭西文学史序説』（1926年4月）に、「諸様式（属）の分化」という言い方があり、関根秀雄が次のように註をつけていました。

「蓋し、ブリュンチエールは、文学上の「様式」genreを、生物学上の「属」若しくは「類」と同様に解釈説明しようとして居るのである。文学上に於いて、genreといふ語は、従来「様式」と訳せられて居るから、姑くそれを採つたが、ブリュンチエールに於いては、寧ろ、生物進化論者の訳法に従つて矢張り「属」又は「類」とするほうが適當かもしれない。

厨川もその著書のなかで、しばしばブリュンチエールの名前を出していました。ですから、文学論の場合は、ブリュンチエールへの注目と共に、「ジャンル」という概念に注意を向けるようになった、と言えるようです。」

* 討議要旨

松原一義氏は、漢文日記について、部分的には文学的なレトリックがあるが、全体を通して文学性が認められるだろうか、と尋ね、発表者は、詩・和歌・日常生活に関する表現の検討を、漢文日記の場合についても試みたい。文学であるか、歴史であるか、ということに拘らずに漢文日記の表現を読んでみてはどうか、と提案、松原氏は、確かに仮名日記と同一レベルのものとして読んでいく方向性が必要であると思う、と答えた。

相田満氏は、当時の考え方のジャンルに沿った発想ということでは、情報学のオントロジでも同じような発想で動いているが、過去の認識と現代の文学についての目的性のずれをどのようにバランスを取るのかが問題になる、と述べた。

鶴崎裕雄氏は、ジャンルを考えていくというのは面白いが、日記・自叙伝・紀行は書く目的とその価値が違う。文学的な価値・史料的な価値についてはどのように考えるか、と尋ね、発表者は、文学的な価値の論争は出来るだけ避けたい。漢文記録の書かれた目的と、仮名日記・紀行文の目的を考えるのは面白いが、なかなか難しいと思う、と答えた。